

自著紹介

『暴力の政治民族誌—現代マヤ先住民の経験と記憶』（大阪大学出版会、2020年）大阪大学・池田光穂

民族誌を読む時に、その調査がなされていた背景について知りたいのは人の常である。私の書物の冒頭と最終の2つの章にはその裏の事情が書かれてある。従来の自著紹介とはかなり破格ではあるが、拙著について、その制作の舞台裏からご紹介してみよう。

私が書いた民族誌調査にもとづく著作は『実践の医療人類学：中央アメリカ・ヘルスケアシステムにおける医療の地政学的展開』（2001年）につづき本書が2作目である。前著は、プラネタリーヘルスという今日では些か欺瞞的言葉で主張される世界保健のスキームが、国民国家の医療体制を通して、巡り巡ってホンジュラス共和国の西部コパン県でのメスティソ農民の生活世界にまで届くさまを描いたものである。つまり伝統医療的な態度がどのようにして西洋近代の公衆衛生政策—M・フーコー流の身体の統治術のひとつ—に取り込まれていったり、局所的な抵抗や飼いや慣らしを試みたりするのかという微細な記述（マイクロロジー）にこだわったものだ。

ホンジュラス滞在中にある財団の若手研究支援のための助成金を戴きグアテマラ共和国に戻り、さらにその西部のクチュマタン高地の先住民小都市に向かい、前著のスタイルを踏襲する医療人類学調査を始めた。しかし、開放的なメスティソ村落とは事情が異なり、軍隊の駐屯と虐殺事件5年後のママ先住民は口を固く閉ざし、当たり障りのない会話に終始するだけで、その調査成果はさっぱりであった。一番気になったのは、ホンジュラスでは住民主体の地域保健活



動の中心で普通に見られたヘルスボランティア（保健普及員）が皆無だったことだ。理由はすぐに判った。内戦期に保健普及員が革命兵士だという嫌疑を軍隊やコミュニティから受け、住民主体の地域保健プログラムが危険視され誰も参加しなかったというのだ。前著の文献研究で指摘したニカラグアやキューバの状況—健康になることと社会正義が結びつく—とは真逆の状況がそこにあったのだ。

内戦時のコミュニティ崩壊が難民化やひいては北米での労働移民のプッシュ要因になったのは明白であった。他方で、内戦後の経済復興や先住民女性のエンパワメントの政府系あるいは非政府系の援助団体も治安の安定化に伴いコミュニティに戻ってきた。海外送金と国際援助の2つの資金が少しづつ還流してきた。

他方、内戦の記憶と向き合うトレンドもはじまりつつあった。REMHI = 歴史的記憶の回復プロジェクトが1995年から始まる。その3年後の98年4月はREMHIを指導していたへ

ラルディ司教が殺害される。殺害に先立つ 10 年前の 1988 年にはエスノヒストリアンあるいは民族考古学者のロバート・カーマック教授が『暴力の収穫：マヤ先住民とグアテマラの危機』という編著を出版した。その論集に寄稿した北米の人類学者を含むメソアメリカニストたち 13 名は、1980 年代前半の暴力の時代（ビオレンシア）を暴力の時期以前からのフィールド資料を基に、フィールドを離れて入手した調査地の惨状の報告を実に多様な形で表現していた。フィールドにおける暴力の様態が多様であり、現地に関わる研究のスタイルも多様であり、そして研究者の政治的ポジションも多様だからである。当然のことながら私も大きなショックを受けた。

私の調査地で半世紀近く前の 1951 年（調査は 1945 年の大戦終了直後）に出版された著名なマウド・オクスによって描かれた、儀礼と占いとコフラディーア（信徒集団）が時間を超えて秘技的な宇宙論を護持するロマンティックな世界など、私が滞在したその小都市には面影すらなかった。その町の街路や路地ではほとんど割り箸で作ったかのような粗末な十字架—先住民の犠牲者の死体が夜になるまで放置されたところ—がそこかしこにあった。隠喩表現だが、その街には犠牲者の血液の匂いが今尚、人々の記憶の中に漂っていた。じつに見事で優雅なその町の民族誌を書いた彼女（オクス）は『暴力の収穫』公刊の 2 年後にアルツハイマーによりカリフォルニアの風光明媚な町「海のカルメル」にて 87 歳の生涯を閉じた。

専門の医療人類学での調査は諦め内戦期の記憶の調査に切り替えることは誰も思いつくはずだが、幸か不幸か科研費の調査で戻った名目は観光研究に関連づけたコミュニティの復興と経済である。グアテマラ内戦の公式終焉は 1996 月 12 月であり、その調査に私の調査のテーマを

切り替えた時期は未だ内戦中であったわけである。そのような外部からやってくる調査者は世界的なトレンドに合わせて調査をするが、その調査対象になる人々は社会的苦悩の真っ最中だという状況であった。これは研究倫理における議論よりも一般的な道徳や普通の人の感情に触れる道義的問題を提起する。そんな逡巡もあって、元原稿である第 3 章先住民共同体と経済（初出名は「暴力の内旋」）が出版された 1998 年からかぞえて本が完成するまで実に 22 年の歳月がかかってしまった。テーマも、暴力の記憶から回復へ、移民労働をめぐる新たな民族アイデンティティの形成、先住民文化復興と関連づけられるナショナルアイデンティティへの接続をめぐる国民的論争、そして、デモクラシー思想の流入に伴うコミュニティ概念の再生と再編と、長期的なトレンドを自分なりに俯瞰できたものになったと思う。従来は、政治関係者へのスノーボール式インタビューや公式政治文書や政治経済統計などでこのような政治的態度のトレンドを明らかにするフォーマリスティックなアプローチがとられる。他方、私の方法は、その場に居合わせた相手が話してくれるまで待っているいろいろなおしゃべりをして、それをホテルや下宿に戻って大急ぎで書き留める方法を取らざるをえなかった（第 11 章参照）。当然、私の主観や、その直前に聞いた別の人の、異なるヴァージョンの記憶が知らない間に加わることがあるだろう。おしゃべりを元にするので、また再会したときに、聞き返した時にニュアンスが微妙に変わることがある。このようなナラティブ構成だが、対話した事実につねに回帰し解釈学的理解の根拠におく言わばサブスタントィビスト的なアプローチになった。その意味では若い時に親しんだオスカー・ルイス的なヒューマニズムに私は未だに心酔しているのだと再確認した

次第だ。

幸いなことに本書には、出版後一年にも満たないが幾つかの書籍紹介や書評も出た。ある紹介文に「門外漢にとって読みやすいとはいえない部分もある」とあるが、私の筆力不足である。だが、それよりも痛ましい記憶とそこからの回復を、読者の皆さんに伝えるまでに、執筆者の道義的問題を私自身の中で整理するのに思わぬ時間がかかったのだ。

この本を手にとった人は表紙の不思議な雰囲気魅了されるかもしれない。この印象的な装画は版画家の山福朱実さんによるものだ。じつは依頼の縁起もラテンアメリカ関連づくしだった。こういうことである。日本の「追われゆく坑夫たち」(1960)を中南米にまで追いかけてルポルタージュした出色の上野英信『出ニッポン記』(1977)やコレヒオ・デ・メヒコで教鞭をとった経験を元に書かれた鶴見俊輔『グアダルupesの聖母』の装丁を手がけた編集者の田村義也に頼みたいが彼は2003年に物故していると私が何気にSNSに呟いたところ、畏友の小林致広さんが、朱実さんの版画がそのイメージにピッタリだよと返事してくれた。装丁作品を調べると石牟礼道子『水はみどろの宮』の装画を手がけるほか絵本『ヤマネコ毛布』などの作品も出されている。そこで編集部を経由してお願いすると引き受けてくださるとの返事。マヤ先住民のイメージがわからないということで、本書に使われた写真と初稿ゲラを送ると同時に、朱実さんのほうでもインターネットで情報収集をしてくださり、満を持してやってきたのが本書の装画である。後でわかったのだが、朱実さんの亡父康政さんは北九州で裏山書房という小さな書肆を経営されていて、康政さん存命中に手作りの版画を装画した上野英信の晩年の著作『ひとくわばり』を刊行していたのだ!! 本書の表

紙に戻ろう。トウモロコシ畑に佇む先住民の背景にはフクロウと農民らしい人影が…、空には太陽と月がある。落掌した瞬間に「これだね!!」と大阪大学出版会編集者の栗原さんとお互いに相槌を打ったものだった。本当に、恐る恐るお願いした甲斐があった。この書物は、内容においても、装画においても、すでに物故した人を含め、長く複雑なコミュニケーションの連鎖の産物になったことに、不思議な奇遇と、ある種の宿命のようなものを感じた。

グアテマラ内戦についての人々にその痛ましい記憶を地球の裏側の日本の同胞の皆さんに散種するまでに意想外の時間がかかってしまったが、今振り返った時に、時間をかけた分の「重たい記憶の時の重み」を伝えるためにまったく無駄な徒労があったとは私には思えない。このテーマに関心をもつ人以外にもより多くの人に読んでいただきたいのが、偽らざる私の気持ちである。 ■

『ラテンアメリカ 地球規模課題の実践』(新評論、2021年) 早稲田大学・畑恵子

本書は共編者である浦部浩之さんと私、そして11人の寄稿者が共有する問題意識から生まれた。その意識とは、「ラテンアメリカに関しては、政情不安、経済的混乱、暴力・無秩序といったネガティブな側面に焦点があてられがちで、この地域が核軍縮・平和構築、環境保全、民主主義、貧困削減、人権保護といった地球規模課題(グローバル・イシュー)と称される諸問題に真摯に向き合い、ときに先駆的な挑戦を試みていることは日本であまり知られていない。だが、ラテンアメリカが取り組んでいる課題は日本が直面する課題でもある。したがって、その実践事例やダイナミズムを知ることによって、日本に暮らす私たちが何かに気づき、自らのあ